

漢初の四分曆について

末 永 高 康

【キーワード】四分曆、睡虎地『質日』、胡家草場『曆日』

一

2006年に湖北省雲夢県睡虎地西漢墓 M77より文帝前元十年（前170）から文帝後元七年（前157）に至る14年間の曆日を記した『質日』が発掘された¹⁾。その詳細は長らく不明のままであったが、『睡虎地西漢簡牘〔壹〕質日』（中西書局、2023年）により、ようやくその全貌が明らかとなった。また、2018年から翌2019年にかけて発掘された湖北省荊州市胡家草場西漢墓 M12からも文帝後元元年以後の曆日を記した資料が出土してきており、この時期の曆日に関する情報は以前に比して豊富になってきている²⁾。

論者は「秦曆復元をめぐる一考察」（『中国出土資料研究』第18号、2014年）において、同時期の曆日についても推定を行っていたが、新たに公開された睡虎地『質日』に記されていた曆日は、論者が推定したものと残念ながら一致していなかった。そこで、本論では、拙論（2014）における推論のどこに誤りがあったのかを明らかにするとともに、現在われわれが手にする資料から漢初の四分曆の実態をどこまで明らかにすることができるのかについて報告することにした。

二

まず、四分曆における大小月のパターンについて簡潔に記しておく。

陰曆においては、小の月（29日）と大の月（30日）とを交互に組み合わせて曆を構成していくが、1朔望月は29.5日より少しばかり長いから、時に大の月を連続させてやらないと日が余ることになる。この大の月の連続を「連大月」と言う。古代の曆では15もしくは13か月を隔てて連大月が入るのであるが、15か月を隔てて連大月を入れて、

{小大小大小大小大小大小大小大小} （以下これを {15} と略記する）

を繰り返すとやがて日が余り、13か月を隔てて連大月を入れて、

{小大小大小大小大小大小大小} （以下これを {13} と略記する）

を繰り返すとやがて日が足りなくなる。そこで両者を組み合わせてやらなければならないのだが、単純な組み合わせで精度のよいものとして、

{15} {15} {13}

{15} {15} {13} {15} {13}

の二つがある。前者は『春秋』の暦におけるパターンとされるので、これを「春秋暦」と呼び、後者は太初暦の月定数29日81分の43の下で導かれるパターンであるから、これを「太初暦」と呼ぶことにしたい。すると、四分暦の月定数29日940分の499から導かれる大小月のパターンは、

{春秋暦} + {太初暦} × 11回

と表されることになる。これを「四分暦」と呼ぶことにしたい。これは繰り返されるパターンであるから、実際の暦日のなかでは、「太初暦」の繰り返しの間に挟まれる形で「春秋暦」が現れる。この「春秋暦」の挟み込みが発見されさえすれば、それだけで、その「四分暦」のサイクル全体を時間軸の上に固定することができる。拙論（2014）の段階では、まだ「春秋暦」の挟み込みを示す資料は見つかっていなかったものの、「太初暦」のサイクルを示す資料はすでに存在していたから、その「太初暦」のサイクルを前後に繰り返して延長したどの部分で「春秋暦」が挟み込まれたのかが確定できれば、この時期の「四分暦」もまた確定できる状況にあった。

{太初暦} の繰り返しの中に「春秋暦」が挟み込まれても、それ以後では、挟み込みがなかった場合の「太初暦」のサイクルの開始月の朔日の干支が一つ遅れるだけで、それ以外の朔日の干支に変化はない。よって、この81か月ごとの朔日の変化にのみ注意していけば、「春秋暦」の挟み込まれた場所が特定できるのであるが、ここで障害となるのが、漢初に行われた「改暦」である。

三

拙論（2014）の段階で確認できた「太初暦」のサイクルは、秦始皇二十四年（前223）九月から始まるサイクルと、秦始皇三十一年（前216）四月から始まるサイクルおよび張家山漢簡『暦譜』に見える高祖十年（前197）正月から始まるサイクルと恵帝四年（前191）八月から始まるサイクルだけである。この秦暦と漢初の『暦譜』が四分暦として同じものであるならば、「太初暦」の繰り返しか、そこに「春秋暦」を挟み込んだ形で両者が接続されるはずである。が、この形で両者を接続することはできない。よって、高祖十年以前に何らかの「改暦」が行われていることになる。

また、銀雀山漢簡の『七年視日』は武帝元光元年（前134）の暦日を示すものであるが、これも同様の方法で張家山『暦譜』と接続することができない。よって、両者の間で少なくとも一回の「改暦」があったことになる。

他方、史書において漢代の改暦が記されるのは武帝太初元年（前104）からであり、それ以前は秦暦を襲用していたとされる。そこで、上の「改暦」を暦元や暦定数の変更をとまなう本格的な改暦ではなく、秦暦をもとにしたアドホックな「補正」と見て、秦暦の連大月を11か月前倒しにした「補正」が高祖十年以前の「改暦」であり、秦暦の連大月を9か月前倒しにした「補正」が武帝元光元年以前の「改暦」であると見なしたのが、拙論（2014）である。これらの「改暦」

を秦暦の連大月を前倒しすることによる「補正」と見ることの是非は後に検討することとして、拙論（2014）の最も大きな誤りは、文帝後元六年（前158）四月乙巳朔と、景帝後元二年（前142）の孔家坡『暦日』の解釈にある。

『史記』や『漢書』の記載から確認される太初改暦以前の朔日の干支は、文帝後元六年四月乙巳朔を除いてすべて張家山『暦譜』を延長したものと一致し、孔家坡『暦日』も張家山『暦譜』の延長上に載る（本論末の【附表】参照³⁾）。文帝後元六年四月乙巳朔にしても、これ以前に「春秋暦」が挟み込まれたと解することによって張家山『暦譜』の延長上に載せることができる。そこで、これを「春秋暦」が挟み込まれた確たる証拠と見なし、張家山『暦譜』から孔家坡『暦日』の間に「改暦」はなく、孔家坡『暦日』以後に「改暦」されて銀雀山『視日』の形になったと判断したのが拙論（2014）である。

ところが、今回公開された睡虎地『質日』の暦日は、張家山『暦譜』の延長上に載せることができない。これは本論末の【附表】から明らかである。両者の間に「春秋暦」が挟み込まれたと考えても、文帝後元六年四月乙巳朔が説明可能になるだけで、それ以外の連大月のずれを説明することはできない。よって、睡虎地『質日』が始まる文帝前元十年（前170）より以前に何らかの「改暦」が行われていたと判断せざるを得ない。

四分暦のパターンは全部で940通りもあるから、一年分程度の暦日がある暦の延長上に載ったからといって、それだけで両者が同じ暦に属すると即断することはできない。極端な例ではあるが、「春秋暦」から始まるように見える暦でも、その最初の月の大小が分からない場合、これが本当に「春秋暦」の頭なのか（この月が小の月の場合）、それとも「太初暦」後半部の「13」「15」「13」の頭なのか（この月が大の月の場合⁴⁾）の区別がつかないから、以下同じ暦日が「太初暦」×11回の末尾の一日前まで続いていたとしても、両者が同じ四分暦であるかどうか判断できない。940か月からわずか一日引いた日数分の暦日が完全に一致していても、四分暦として同じであると判断できない場合があるわけである。にもかかわらず、張家山『暦譜』の延長上に孔家坡『暦日』が載ったのを見て、それだけで両者の間に「改暦」が無かったと即断してしまったところに、拙論（2014）の誤りがあったのである⁵⁾。

四

ちなみに、孔家坡『暦日』や銀雀山『視日』は、ともに睡虎地『質日』の延長上に載る⁶⁾。これは睡虎地『質日』に確認される文帝十四年（前166）七月と文帝後元五年（前159）二月から始まる「太初暦」のサイクルを繰り返したもの（【附表】参照）からも読み取ることができるが、胡家草場西漢墓 M12 出土の『暦日』からも確認できる。この胡家草場『暦日』は文帝後元元年（前163）から百年間分の各月の朔日の干支を記した「暦」と、同じ期間の冬至、立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立冬の干支を記した「日至」より成り、まだごく一部分しか公開されて

いないものの、李志芳・蔣魯敬「湖北省荆州市胡家草場西漢墓 M12出土簡牘概述」(『考古』2020年第2期、以下「概述」と略称)が、文帝後元元年から数えて22番目(前142に相当)の朔日の干支が、景帝後元二年(前142)の孔家坡『暦日』のそれと完全に一致し、同30番目(前134に相当)の朔日の干支が、武帝元光元年(前134)の銀雀山『視日』のそれと完全に一致していることを報告している⁷⁾。

この胡家草場漢簡には大事記の『歳紀』が含まれており、その記載が文帝十六年で終わっていることと、『暦日』が文帝後元元年から始まっていることから、荊州博物館「湖北荆州市胡家草場墓地 M12発掘簡報」(『考古』2020年第2期)は、この墓の下葬年代を文帝後元元年(前163)以後であると推定している。『暦日』のナンバーリングが景帝の改元の影響を受けていないことを考えれば、その下葬年代は景帝元年(前156)以前であると見なしてよいであろう。この『暦日』は文帝後元時期の暦がそのまま百年分保存されたものと考えられるのである。よって、文帝後元元年以後に「改暦」がなかったとすれば、太初の改暦(前104)以前については、この『暦日』を当時の暦として用いることができる。

この胡家草場『暦日』で興味深いのは、既発表の部分だけからでも、{春秋暦}の挟み込みの跡を確認できることである。荊州博物館・武漢大学簡帛研究中心『荆州市胡家草場西漢簡牘選粹』(文物出版社、2021年、以下『選粹』と略記)の頁114に、

九十 辛未、庚子、庚午、己亥、己巳、戊戌、戊辰、戊戌、丁卯、丁酉、丙寅、丙申。

と見える「暦」の90番目の簡は、武帝元平元年(前74)に相当する一年の朔日の干支を記したものであるが、これは【附表】に示した睡虎地『質日』を延長したものと、三月のところで食い違う(十月が歳首であることに注意)。睡虎地『質日』を延長したものだとして「己亥」となるものが、一つ手前の「戊戌」となっている。この部分はちょうど睡虎地『質日』を延長したものの{太初暦}のサイクルの始めに位置しており、先に記したようにこの部分での干支の遅れはこれ以前に{春秋暦}が挟み込まれたことを示している。この挟み込みの位置を特定するためには【附表】で「■ {太初暦}の始まり」と記した部分(11、18、24、31、38、44、51、57、64、70、77、83番目の簡⁸⁾)を見る必要があるのだが、遺憾なことにこれらの簡の情報はまだ公開されていない。

ともあれ、胡家草場『暦日』には{四分暦}940か月分の情報がすべて記されているから(日至日を含めて!)、これにより文帝後元期の四分暦の姿を完全に復元できることになる。一日でも早くその全容が明らかにされることを期待したい。

五

次に議論すべきは、先に保留しておいた、太初の改暦以前の「改暦」を秦暦の連大月を前倒しにした「補正」と見ることの是非である。

まず、睡虎地『質日』以後、銀雀山『視日』以前の間で「改暦」がなく、両者が同じ暦である

とするならば、この暦を秦暦の連大月を9か月前倒しにしたものと見ることはできない。【附表】から明らかなように、睡虎地『質日』の暦は秦暦の連大月を26か月前倒し（正確には、 n を0から11として $26+81n$ か月前倒し）したものだからである。拙論（2014）で示したように連大月の前倒しの効果が容易に知られるのは、15以下の奇数分の前倒しの場合に限られるから、これを秦暦の連大月を前倒しした「補正」と見ることは難しいであろう。これを連大月の前倒しによる「補正」と見るのであれば、直接に秦暦ではなく、張家山『暦譜』の暦の連大月をさらに15か月前倒ししたことによる「補正」と考えなければならない。連大月の前倒しによる補正は、15か月、13か月、11か月と前倒しの月数を減らすごとに「補正」の度合いが大きくなるから、張家山『暦譜』の暦に最も小さな「補正」を加えたのが睡虎地『質日』の暦と考えられるのである。

ここで検討すべきは、胡家草場漢簡『歳紀』の高祖九年の次の記事である。

七月、以丙申朔、朔日食、更以丁酉⁹⁾。

この記事について「概述」は、『漢書』高帝紀「九年……夏六月乙未晦、日有食之」を引いて、簡文に記してある日食の日時（七月朔日丙申）は『漢書』に記してあるものより一日遅れており、また朔日に日食が発生したために、七月の朔日を丁酉に改めたと説明している。日食が発生したために朔日を改めた記載は、これが初見であり、古代の朔日の設置についてのわれわれの認識を拡大した。

と分析を加えている。四分暦の月定数は1朔望月より若干大きいから、これを長く使っていると朔（太陽と月が同じ黄経にある時点）が暦の上の朔日より早く到来することになる。実際、漢初の日食（これは朔の前後の時間帯で生ずる）の大半は朔日ではなく晦日に起こっており、ここでの日食の日時も、晦日にずれ込んでいる『漢書』の記述の方が正しいと思われるのであるが、それは問わないとしても、この記事はまったく不可解である。日食は朔日に起こるべきものであるから、「以丙申朔、朔日食」が、「概述」の解するように、「丙申朔に日食があった」の意味であるならば、どうしてその朔日を改める必要があるのか理解に苦しむ。あるいは「朔日食、更以丁酉」は、「朔日に日食があるべきものであるから、（実際に日食の起こった）丁酉を朔日とした」の意味であるのかもしれないが、上述のようにこの時期の朔は暦の朔日より早まっているから、暦の朔日の翌日に日食が起こることはまずあり得ない。また、同様の理由で、この時期の暦を改めるのであれば、暦の朔日を前倒しにする方向に改めなければならないはずで、丙申朔を丁酉朔に後ろ倒しにしてしまつては、朔と朔日との乖離はますます大きくなるだけである。それ故であろうか、この「改暦」は張家山『暦譜』には反映されていない（【附表】参照）。よって、『歳紀』のこの記事にはどこか誤りが含まれていると考えられるのであるが、ともかくも、日食を機に朔日を移動させるという考え方が漢初に存在していたことを、この記事は示している。

日食が朔日以外で起こっていれば、その部分で朔が朔日からずれていることはわかるものの、それだけでは暦元を改めなおすような改暦を行うことはできない。暦元を改めるためには現行の

暦とどれだけ朔がずれているのかを正しく把握しておく必要がある。特に四分暦の場合、暦元を正しく定めて改暦するためには、940分の1日（約1.5分）刻みで朔の位置を知らなければならないが、一回の日食の観測で朔の位置をこの精度で測定するのは困難である。太初の改元時の起点とされた元封七年（前104）十一月の「朔旦冬至」がそれほど正確でなかったことから推しても¹⁰⁾、漢初の人が一回の日食の観測を通じて分刻みでの朔の位置を把握して改暦を行っていたとは思われない。他方、拙論（2014）で論じたように、連大月の前倒しによる補正の場合、連大月の直後の小の月のところで朔が前日にずれていれば15か月の前倒し、次の小の月のところまで朔が前日にずれていれば13か月の前倒しといった形で、朔の正確な位置を把握していなくても、日食によって朔のずれが感知されれば、それで補正を加えることができる。よって、日食を機にただちに「改暦」を行っているのであれば、この連大月の前倒しによる「補正」であると考えるのが最も合理的であろう。

ただし、この連大月の前倒しによる「補正」が行えるのは小の月の朔日から朔がずれていた場合に限られる。高祖九年七月は大の月であるから、この月の丙申朔を改める「改暦」が本当に行われていたのであれば、それは連大月の前倒しとは異なる方法によってあったと考えなければならない。拙論（2014）のように、漢初の「改暦」がすべて連大月の前倒しによる「補正」であったと強く主張することはためられるのである。ここでは、張家山『暦譜』の暦は秦暦の連大月を11か月前倒しにする「補正」によって導かれたものであり、睡虎地『質日』の暦は張家山『暦譜』の暦の連大月をさらに15か月前倒しにする「補正」によって導かれたものである可能性がある、との主張にとどめることにしたい。

よって、秦暦と漢初の暦を接続することによって秦暦を確定するという拙論（2014）の試みはここに放棄されることになる。ただし、かりに上の主張が正しいのであれば、胡家草場『暦日』によって文帝後元期の四分暦は確定できるから、その連大月を26か月後ろ倒しにすることによって秦暦もまた確定することになる。また、拙論（2014）の末尾に記した、秦始皇二十四年（前223）以前に『春秋暦』の挟み込みを見つけることによって秦暦の確定を試みるという作業については、漢初の暦との接続を前提とするものではないから、依然として有効である。

六

拙論（2014）を踏まえた拙論に以下の三点がある。

- ①『香港中文大学文物館蔵簡牘』干支表篇（『文帝十二年質日』）の復元（『中国研究集刊』 関号〔総五八号〕、2014年）
- ②北京大学蔵西漢竹書『節』の孝景元年冬至日をめぐって（『出土文献と秦楚文化』第9号、2016年）
- ③漢初の暦の暦元について（『中国研究集刊』光号〔総六二号〕、2016年）

この内、①については、拙論（2014）における誤りの影響は全くない。文帝十二年の暦日は、張家山『暦譜』を延長したものと、睡虎地『質日』のそれが完全に一致しており、かつ、この時期でこの年の暦日と一致する年は他に無いからである。

②については、そこでの表に記した朔日の干支と月の大小および各月中気の日付については一部修正を加える必要があるものの、そこでの議論それ自体に修正を加えるべきところはない。その表の修正も、張家山『暦譜』を延長したものと、睡虎地『質日』およびそれを延長したものとで、月の大小がずれるところでは、大の月に改めた部分で中気の日付を一日増やしてやればよいだけである。よって、そこで示した表2～表6を修正して、改めてここに載せることはしない。本論末の【附表】を見れば、この修正は簡単にできる¹¹⁾。

なお、拙論②で決定できていない文帝後元期以後の暦における置閏の基準月（正月雨水もしくは十二月大寒）について、睡虎地『質日』と胡家草場『暦日』を利用して、拙論②の議論を続けるならば、雨水と大寒が月初めと月末に来る年（それぞれ19年ごとに来る）の雨水日と大寒日は次のようになる¹²⁾。

3番目（前161）	大寒乙未（12月1日）	雨水乙丑（正月2日）
11番目（前153）	大寒丁丑（12月29日）	雨水丁未（正月30日）
22番目（前142）	大寒甲戌（12月1日）	雨水乙巳（正月2日）
30番目（前134）	大寒丙辰（12月28日）	雨水丁亥（正月30日）
41番目（前123）	大寒甲寅（12月1日）	雨水甲申（正月1日）
49番目（前115）	大寒丙申（12月29日）	雨水丙寅（正月29日）
60番目（前104）	大寒甲午（12月1日）	雨水甲子（正月2日）
68番目（前96）	大寒丙子（12月29日）	雨水丙午（正月29日）
79番目（前85）	大寒甲戌（12月1日）	雨水甲辰（正月2日）
87番目（前77）	大寒丙辰（12月29日）	雨水丙戌（正月30日）
98番目（前66）	大寒癸丑（12月1日）	雨水甲申（正月2日）

この100年間で大寒、雨水ともにそれぞれの月内に収まっていて、置閏の基準月から一方を排除することができない¹³⁾。暦日を見るだけでは、この時期の置閏の基準月は一に定まらないようなのである。ここでの大寒、雨水の日付を見てみると、この時期の置閏の基準は、あるいは両者に挟まれた立春にあるのではないかとも思われるのであるが、これは後に付帯的に検討するとして、この時期の置閏法を定めるためには、直接にそれを記した資料の出現を待つ必要がある。

ちなみに胡家草場『暦日』の「日至」には、

冬立十月至十一月、春立十二月下旬至正月上旬、夏立四月至五月、秋立七月。四時之分、常在四時中月之中¹⁴⁾。

とあって、これも置閏法と関連する記述であるが、閏月が年末に置かれる限り、すべての「四時

の分」(冬至、夏至、春分、秋分)が、「常に四時中月の中に在り」とそれぞれの季節の中月に収まることはあり得ない。たとえば「概述」は銀雀山『視日』の元光元年(前134)に当たる「日至」の30番目の簡が次のようになっていることを示し、

卅 丙戌、壬申、丁巳、癸卯、戊子、甲戌、甲申、乙巳¹⁵⁾。

これが『視日』の冬至、立春、夏至、立秋の干支と一致していることを言うが、これに月日を当てると、

冬至丙戌(11月28日) 立春壬申(正月15日)

春分丁巳(3月1日) 立夏癸卯(4月17日)

夏至戊子(6月3日) 立秋甲戌(7月20日)

秋分甲申(7月30日) 立冬乙巳(閏9月22日)

となる。この内、秋分の甲申は明らかに誤りで、己未(9月6日)としなければならないが、冬至を除いて、春分、夏至、秋分ともにそれぞれの季節の中月から外れている。これを外れないようにするためには、たとえば、それぞれの季節の末尾に閏月を置く形にしなければならない。が、この時期の暦に閏九月以外の閏月があった形跡はまったくない。

また前半部の「冬は十月より十一月に至るに立ち」云々というのも奇妙で、これが立冬、立春、立夏、立秋の存在する月を言うのであれば、立冬は「九月至十月」、立夏は「三月至四月」、立秋は「六月至七月」としなければならない。この内、「六月至」はこの簡の書き手が書き落としただけであるのかも知れないものの、これらの記事は、胡家草場『暦日』のテーブルを作成したものがいかに暦の知識を欠いていたのかを示すものと言えよう。ただ、ここで立春だけ「春は十二月下旬より正月上旬に至るに立つ」と限定されているのは、この暦における置閏の基準が立春を含んでその前後に置かれていたことを示唆しており、興味深い。

七

他方、ここで改めて議論をする必要があるのは③である。この拙論(2016)は、景帝後元二年(前142)の孔家坡『暦日』と武帝元光元年(前134)の銀雀山『視日』の間で——拙論(2014)の理解に従えば——何らかの「改暦」が行われて朔小余の変動があるのにもかかわらず、節気小余の変動がないことに注目して、漢初の暦においては、節気と朔の一致する暦元が設けられていなかった可能性について論じたものである。

上に記したように、孔家坡『暦日』や銀雀山『視日』は、ともに睡虎地『質日』の延長上に載るから、この三者は同じ暦で、孔家坡『暦日』と銀雀山『視日』の間では「改暦」がなかったと見るのが穏当であろう。「改暦」がなかったから、節気小余の変動もないのである。拙論(2016)では、孔家坡『暦日』が張家山『暦譜』の延長上に載ることから、逆に孔家坡『暦日』の節気小余を張家山『暦譜』に遡及させてしまっているが、これは正しい措置ではなかったことになる。

現在、張家山『暦譜』の時期の節気小余を直接に伝える資料は存在しないから、拙論（2016）の議論は、睡虎地『質日』以後の暦に限定した形で、次のように論じ直されなければならない。議論すべきは、睡虎地『質日』および胡家草場『暦日』に示された暦が節気と朔の一致する「基点」を持ち得るか否かである。

まず睡虎地『質日』と孔家坡『暦日』との間で節気小余に変動のないことを確認しておく。睡虎地『質日』には後元五年から七年にかけての三年分の冬至日、立春日、夏至日、立秋日が記されているが、この後元六年（前158）の立春日（十二月丙寅）と夏至日（五月壬午）から、この年の立春の小余が0であるとわかる。立春から夏至までは15日 $7/32 \times 9 = 136$ 日31 / 32、他方、十二月丙寅より五月壬午までは136日であるから、立春の小余が1（/ 32）以上だと、夏至日が翌日の五月癸未になってしまうのである。節気小余は4年で回帰するから、ここから16年後の景帝後元二年（前142）の立春の小余も0で、これは孔家坡『暦日』のそれに一致する。よって、両者の間に節気小余の変動は見られない。

拙論（2016）で示したように、節気と朔が一致する「基点」となり得るのは、小余が0となり得る節気に限られるから、この場合、「基点」における節気は正月立春、五月芒種、九月寒露に限られる。後二者が「基点」に置かれたとは考え難いから、これは後に付随的に議論するとして、まずは、この時期の暦の「基点」が立春朔であった場合について検討する。

この検討において必要なのが、この時期の置閏の基準月と、この時期の「太初暦」のサイクルの開始月である。前者については、これが中氣に取られたのであれば、上の議論から、正月雨水または十二月大寒である。後者については、上述のように、文帝十四年（前166）七月と文帝後元五年（前159）二月の二者が確認できるが、睡虎地『質日』からその年の立春日——正月庚申（8日）——がわかる後者を利用するのが便利である。この年においては「太初暦」のサイクルの開始月の前月8日に立春が来るわけである。

「太初暦」のサイクルの始まりの朔小余は1から11の値しか取らないから、置閏の基準を正月雨水または十二月大寒に取って、立春朔から四分暦を構成していったら、その暦の上で朔小余が1から11の値を取る月の前月の8日に立春が来ないのであれば、この時期の暦の「基点」は立春朔ではなかったことになる。

この作業は表計算ソフトのエクセルがあれば、拙論（2016）の【付録】に記した方法で簡単にできるから¹⁶⁾、その過程は省略して、結果のみ記せば、置閏の基準を正月雨水に取った場合、朔小余が9の値を取る月のみ、その前月に立春が来るが、その日は8日ではなく9日である。よって、この場合、この時期の暦の「基点」は立春朔ではなかったことになる。置閏の基準月を十二月大寒としても立春朔が「基点」ではないこと¹⁷⁾、置閏の基準月を正月、十二月いずれに取っても、芒種朔、寒露朔が「基点」でないことも同様に示される¹⁸⁾。四分暦の場合、暦元はこの「基点」もしくは、それを940月の倍数分遡った時点に置かれるから、これはこの時期の暦が朔と節

気が一致する暦元を持たないことを示している。

ここで、この「基点」の条件を緩和して、(もはや「点」ではないが) 立春と朔が同時ではなくとも、同じ日に属していればよいとするのであれば、置閏の基準を正月雨水に取った場合、立春より朔を半日もしくは3/4日ずらしてやれば——朔小余を470もしくは705から始めるということである——、同じ朔小余9の前月の8日に立春が来ることになる。あるいはこの時期の暦はそのような形で構成されたものであるのかも知れない¹⁹⁾。

ただし、最初の朔小余を1増やして、471もしくは706にすると、今度は朔小余10の前月の8日に立春が来て、最初の朔小余を1減らして469もしくは704にすると、今度は朔小余8の前月の8日に立春が来るという形で、{太初暦}の開始の前月8日が立春となるパターンは計22通りある。これを絞り込むためには、{春秋暦}の挿入箇所を明らかにして、文帝後元五年(前159)二月の朔小余を確定する必要がある。

ここで付带的に議論すべきは、立春が置閏の基準とされていた可能性である。立春は中気ではないから、これが必ず正月に含まれるようにする、ということとはできない。よって、これを基準とするならば、たとえば「立春が15日以後になる場合は²⁰⁾、その月を閏月とする」といった形となる。これが最も簡便な措置であるが、これでは閏十二月となる。閏九月を入れる形にしたいのであれば、「その月を閏月とする」を「その月の三か月前を閏九月とする」とすればよい。少なくともエクセル上の作業としてはこの方がずっと簡単で、拙論(2016)の【付録】に記した方法では、E列を0として、G列の数字が14を超えるのであれば、その三か月前に閏九月が挟まれたと考えればよい。

この場合でも定性的には上の議論とほとんどかわらない。朔小余が9の値を取る月のみ、その前月に立春が来るが、その日は8日ではなく9日である。よって、この場合でも、この時期の暦の「基点」は立春朔ではなかったことになる。この「基点」の条件を緩和して、立春より朔を1/4日ずらして朔小余を235から始めれば、朔小余9の前月の8日に立春が来ることになるから、あるいは、これこそがこの時期の暦の構成法であったのかも知れない。ただし、当初の朔小余を227から237の間にとっても{太初暦}の開始の前月8日が立春となるから、現状ではこれも確定的に語るわけにはいかない。

文帝後元期以前の暦については、当時の節気小余がわかる資料が現れてから議論すべきであろうが、かりに節気小余の変動がなかったとすれば、拙論(2016)で論じたように、秦暦も漢初の暦もともに朔と節気一致する暦元を持たないことになる。よって、拙論(2014)の誤りにもかかわらず、拙論(2016)の結論それ自体に変更すべき点はない。

八

最後に本論末の【附表】を用いて、漢初の暦日が現在どこまで明らかになっているのかを記しておく。

高祖元年（前206）から高祖四年（前203）の間は、それ以前の秦暦がそのまま用いられていたのか、すでに「改暦」されて張家山『暦譜』に移行しているのかを確定できない。前者であれば表の上段、後者であれば下段が各月朔日の干支を示すことになる。ただし、{太初暦}の始まりの部分においては、朔日の干支が一つ遅れる可能性がある。

高祖五年（前202）から呂后二年（前186）の間は、表の下段の張家山『暦譜』の暦日を用いることができる。ただし、胡家草場漢簡『歳紀』が記すように高祖九年に本当に「改暦」があったのであれば、修正が必要となる部分が出てくるかも知れない。

呂后三年（前185）から文帝九年（前171）の間は、どこかで張家山『暦譜』の暦から睡虎地『質日』の暦へと切り替わっているわけであるが、それがどの時点であるのかを確定できない。「張家山から」と記した中段もしくは「睡虎地へ」と記した下段のいずれかが朔日の干支となる。この部分でも{太初暦}の始まりの部分においては、朔日の干支が一つ遅れる可能性がある。

文帝十年（前170）から文帝後元七年（前157）までは、睡虎地『質日』の暦日を用いることができる。

景帝元年（前156）から太初の改暦（前104）以前は、この期間に「改暦」がなかったとすれば、睡虎地『質日』を延長した【附表】の暦日を用いることができる。ここでも{太初暦}の始まりの部分において、朔日の干支が一つ遅れる可能性があるが、胡家草場『暦日』が公開されて、{春秋暦}の挟み込みの時点が確定すれば、この問題は解決する。

冬至、立春を代表とする節気については、文帝後元期以後は文帝後元六年の立春の小余が0で確定しているものの、それ以前についてはわからない。それを明らかにする資料、および秦暦から張家山『暦譜』の暦への転換点、張家山『暦譜』の暦から睡虎地『質日』の暦への転換点を示す資料が出現することを切に願う。

註

- 1) 「湖北省雲夢県睡虎地 M77発掘簡報」（『江漢考古』2008年第4期）参照。
- 2) 他、荊州博物館編・彭浩主編『張家山漢墓竹簡〔三三六号墓〕』（文物出版社、2022年）に1985年に該墓から発掘された文帝前元七年（前173）の暦（『七年質日』）が含まれている。
- 3) 【附表】においては、孔家坡『暦日』の「九月小」を「九月大」に改めるなど、出土資料における明らかな誤記は訂正した形で載せてある。
- 4) 正確にはこの場合、この月は {15} {15} の末尾の連大月の最初のひと月となり、{13} はこ

の翌々月から始まる。

- 5) 拙論(2014)の名誉のために付け加えておけば、「実は、同年(=文帝後元六年)以前に張家山『暦譜』の暦から銀雀山『視日』の暦へと移行した場合にも、同様の干支の遅れ(=丙午朔から乙巳朔)が起こるのであるが」と文帝後元六年以前に「改暦」が行われた可能性についても配慮がなされていないわけではない。
- 6) 拙稿(2014)で孔家坡『暦日』と銀雀山『視日』が接続できないと判断したのは、後者が秦暦の連大月の入れ方を9か月前倒しにしたものと誤って理解していたからである。
- 7) 後者については後述の『選粹』頁109の写真からも確認できる。
- 8) 四分暦は76年で回帰するから、77番目以後の簡を確認する必要はないのだが、一応ここに含めておく。
- 9) 『選粹』頁9。
- 10) 拙論(2014)の注26参照。
- 11) 拙論②の表2～4には、拙論(2014)に由来する誤りとは別に、そこでの議論に影響を与えない誤りが一部含まれているが、それを発見するのも容易であろう。また、表5の呂后8年の部分は、張家山『暦譜』を延長したものと睡虎地『質日』を遡及させたもののいずれを用いるべきか判断しかねるが、どちらを用いても拙論②の議論に影響はない。
- 12) いずれも推定値である。
- 13) 四分暦の場合、日の干支を除いて76年で回帰するから、ここでも76年分だけ確認すれば十分であり、79番目以後の日付(干支ではなく)は、3番目以後の繰り返しとなっている。
- 14) 『選粹』頁118。
- 15) また『選粹』頁123参照。
- 16) ただし、以下の読み替えは必要となる。
- ・D列に関する議論で「これで、当初に冬至が朔日であった場合の、各月初めから次の冬至に至るまでの日数が求められる」の「冬至」を「立春」に読み替える。
 - ・E1について「ここに当初の冬至までの日数(ここでは14日11 / 32日)を加えるために、E1に $=14+11 / 32$ 」の「冬至」を「雨水」に読み替え、入力する数字を15+7 / 32とする。また、以下の「冬至(日)」を「雨水(日)」に読み替える。
 - ・K列について、ここで求めたいのは雨水日ではなく立春日なので、J列からE1の数値を引いて切り上げるためにK1には $=\text{ROUNDDOWN}(J1 - E1, 0) + 1$ を入力して下までドラッグする。このK列で「-15」以外の数字が入っているところが立春日を示すものであり、この部分の数値がマイナスの場合は立春日が十二月にずれ込んでいることを示す。
- 17) この場合、A1には、正月朔の朔小余が0である時の十二月の朔小余である441が入ることに注意。E1の数値も15-7 / 32であり、K1でも十二月の日数である30を加えて切り下げて

1を加えたものから30を引く必要がある。以下の芒種朔、寒露朔の場合も同様の調整が必要となるが、その調整の詳細については省略する。置閏の基準を大寒に取り、立春朔から四分暦を構成した場合、朔小余11の時のみ前月に立春が来るが、その日は15日である。

¹⁸⁾ 置閏の基準を雨水に置いた場合、芒種朔の場合は朔小余6の時のみ前月に立春が来るが、その日は16日で、寒露朔の場合は朔小余3の時のみ前月に立春が来るが、その日は23日である。置閏の基準を大寒に置いた場合、芒種朔の場合、寒露朔の場合ともに朔小余1～11の前月に立春が来ることはない。

¹⁹⁾ 拙論（2016）で言及した「立春と朔との差が、 $1/4$ 、 $2/4$ 、 $3/4$ 日であるというような「きれいな」関係」が見出されたということである。

²⁰⁾ これが「15日」である必然性はないが、この時期の暦においては、正月雨水、十二月大寒がそれぞれの月を外れないから、この数値は $13日25/32$ 以上 $15日7/32$ 未満に取らなければならない。もしこの置閏法が用いられていたとするならば、上に示したように、大寒が1日に来ることが少くないのに対して、雨水が1日に来ることが少ないことから、この数値は $15日7/32$ により近かったものと考えられる。

（付記）本研究はJSPS 科研費22K00057（代表者：名和敏光）による成果の一部である。

附表：{太初曆}のサイクルによる漢初の朔間表（最上段は秦曆を延長したもの）

	10月	11月	12月	正月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	後9月
高祖元年 前206 張家山へ	丁亥大	丁巳小	丙戌大	丙辰小	乙酉大	乙卯小	甲申大	甲寅小	癸未大	癸丑小	壬午大 { 13 }	壬子大	
高祖2年 前205 張家山へ	壬午小	辛亥大	辛巳小	庚戌大	庚辰小	己酉大	己卯小	戊申大	戊寅小	丁未大	丁丑小	丙午大	丙子小
高祖3年 前204 張家山へ	乙巳大	乙亥小	甲辰大 { 15 }	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大 { 13 }	壬申大	壬寅小 ★{太初曆 の始まり}	辛未大	辛丑小	庚午大	
高祖4年 前203 張家山へ	庚子小	己巳大	己亥小	戊辰大	戊戌小	丁卯大 { 13 }	丁酉大	丁卯小 ●{太初曆 の始まり}	丙申大 の始まり	丙寅小	乙未大	乙丑小	
高祖5年 前202 張家山	甲午大	甲子小	癸巳大	癸亥小	壬辰大	壬戌小	辛卯大	辛酉小	庚寅大	庚申小	己丑大 { 15 }	己未大	己丑小
高祖6年 前201 張家山	戊午大	戊子小	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	乙卯大	乙酉小	甲寅大	甲申小	癸丑大	癸未小	
高祖7年 前200 張家山	壬子大	壬午小	辛亥大 { 15 }	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小	丁丑大	
高祖8年 前199 張家山	丁未小	丙子大	丙午小	乙亥大	乙巳小	甲戌大 { 13 }	甲辰大	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛丑大
高祖9年 前198 張家山	辛未小	庚子大	庚午小	己亥大	己巳小	戊戌大	戊辰小	丁酉大	丁卯小	丙申大 { 15 }	丙寅大	丙申小	
高祖10年 前197 張家山	乙丑大	乙未小	甲子大	甲午小	癸亥大	癸巳小	壬戌大	壬辰小	辛酉大	辛卯小	庚申大	庚寅小	己未大 { 13 }
高祖11年 前196 張家山	己丑大	己未小 ●{太初曆 の始まり}	戊子大 の始まり	戊午小	丁亥大	丁巳小	丙戌大	丙辰小	乙酉大	乙卯小	甲申大	甲寅小	
高祖12年 前195 張家山	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小	辛亥大 { 15 }	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	己卯大	己酉大	戊寅大 { 15 }	戊申大
惠帝元年 前194 張家山	戊寅小	丁未大	丁丑小	丙午大	丙子小	乙巳大	乙亥小	甲辰大	甲戌小	癸卯大 { 15 }	癸酉大	癸卯小	壬申大
惠帝2年 前193 張家山	壬寅小	辛未大	辛丑小	庚午大	庚子小	己巳大	己亥小	戊辰大	戊戌小	丁卯大	丁酉小	丙寅大 { 13 }	丙寅大
惠帝3年 前192 張家山	丙申大	丙寅小	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	癸巳大	癸亥小	壬辰大	壬戌小	辛卯大	辛酉小	
惠帝4年 前191 張家山	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小	戊子大 { 15 }	戊午小	丁亥大	丁巳小	丙戌大 { 13 }	丙辰大	丙戌小 ★{太初曆 の始まり}	乙卯大	乙酉小
惠帝5年 前190 張家山	甲寅大	甲申小	癸丑大	癸未小	壬子大	壬午小	辛亥大 { 13 }	辛巳大	辛酉小 ●{太初曆 の始まり}	庚辰大	庚戌小	己卯大	
惠帝6年 前189 張家山	己酉小	戊寅大	戊申小	丁丑大	丁未小	丙子大	丙午小	乙亥大	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大 { 15 }	癸卯大
	戊申大 { 15 }	戊寅大	戊申小	丁丑大	丁未小	丙子大	丙午小	乙亥大	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	癸卯小

惠帝7年前188	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大	庚午小	己亥大	己巳小	戊戌大	戊辰小	丁酉大	
張家山	壬申大	壬寅小	辛未大	辛丑小	庚午大 15	庚子大	庚午小	己亥大	己巳小	戊戌大	戊辰小	丁酉大	
呂后元年 前187	丁卯小	丙申大	丙寅小	乙未大 15		乙未小	甲子大	甲午小	癸亥大	癸巳小	壬戌大	壬辰小	
張家山	丁卯小	丙申大	丙寅小	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	癸巳大 13	癸亥大	癸巳小	壬戌大	壬辰小	
呂后2年前186	辛酉大	辛卯小	庚申大	庚寅小	己未大	己丑小	戊午大 13	戊子大	戊午小	丁亥大	丁巳小	丙戌大	丙辰小
張家山	辛酉大	辛卯小	庚申大	庚寅小	己未大	己丑小	戊午大	戊子小	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	乙卯大 15
呂后3年前185	乙酉大	乙卯小	甲申大	甲寅小	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小	辛巳大	辛亥小	庚辰大 15	庚戌大	
張家山から	乙酉大	乙卯小	甲申大	甲寅小	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	
睡虎地へ	乙酉大	乙卯小 ■[太初曆]の始まり	甲申大	甲寅小	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	
呂后4年前184	庚辰小	己酉大	己卯小	戊申大	戊寅小	丁未大	丁丑小	丙午大	丙子小	乙巳大	乙亥小	甲辰大	
張家山から	己卯大	己酉小	戊寅大 13	戊申大	戊寅小 ★[太初曆]の始まり	丁未大 15	丁丑小	丙午大	丙子小	乙巳大	乙亥小	甲辰大	
睡虎地へ	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小	丁未大 15	丁丑大	丁丑小	丙午大	丙子小	乙巳大	乙亥小	甲辰大	
呂后5年前183	甲戌小	癸卯大 13	癸酉大	癸卯小 ●[太初曆]の始まり	壬寅大	壬申小	辛未大	辛丑小	庚午大	庚子小	己巳大	己亥小	戊辰大
張家山から	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛未大	辛丑小	庚子大 15	庚午大	庚子小	己巳大	己亥小	戊辰大
睡虎地へ	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛未大	辛丑小	庚子大	庚午小	己亥大 15	己巳大	己亥小	戊辰大
呂后6年前182	戊戌大	丁卯大	丁酉小	丙寅大	丙申小	乙丑大 15	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	癸巳大	癸亥小	
張家山から	戊戌小	丁卯大	丁酉小	丙寅大	丙申小	乙丑大	乙未小	甲子大	甲午小	癸亥大	癸巳小	壬戌大 15	
睡虎地へ	戊戌小	丁卯大	丁酉小	丙寅大	丙申小	乙丑大	乙未小	甲子大	甲午小	癸亥大	癸巳小	壬戌大 13	
呂后7年前181	壬辰大	壬戌小	辛卯大	辛酉小	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小	戊子大	戊午小	丁亥大 15	丁巳大	
張家山から	壬辰大	壬戌小	辛卯大	辛酉小	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小	戊子大	戊午小	丁亥大	丁巳小	
睡虎地へ	壬辰大	壬戌小	辛卯大	辛酉小	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小	戊子大	戊午小	丁亥大	丁巳小	
呂后8年前180	丁亥小	丙辰大	丙戌小	乙卯大	乙酉小	甲寅大	甲申小	癸丑大	癸未小	壬子大	壬午小	辛亥大	辛巳小
張家山から	丙戌大	丙辰小	乙酉大 13	乙卯大	乙酉小	甲寅大	甲申小	癸丑大	癸未小	壬子大	壬午小	辛亥大	辛巳小
睡虎地へ	丙戌大	丙辰小	乙酉小	乙卯大	甲申大 15	甲寅大	甲申小	癸丑大	癸未小	壬子大	壬午小	辛亥大	辛巳小
文帝元年前179	庚戌大 13	庚辰大	庚戌小	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小	丁丑大	丁未小	丙子大	丙午小	乙亥大	
張家山から	庚戌大	庚辰小	己酉大	己卯小	戊申大	戊寅小	丁未大 15	丁丑大	丁未小	丙子大	丙午小	乙亥大	
睡虎地へ	庚戌大	庚辰小	己酉大	己卯小	戊申大	戊寅小	丁未大 13	丁丑大	丁未小 ■[太初曆]の始まり	丙子大	丙午小	乙亥大	
文帝2年前178	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	癸卯小	壬申大 15	壬寅大	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大	庚午小	己亥大
張家山から	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	癸卯小	壬申大	壬寅小	辛未大	辛丑小	庚午大 13	庚子大	庚午小 ★[太初曆]の始まり	己亥大
睡虎地へ	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	癸卯小	壬申大	壬寅小	辛未大	辛丑小	庚午大 13	庚子小	庚午小 15	己亥大
文帝3年前177	己巳小	戊戌大	戊辰小	丁酉大	丁卯小	丙申大	丙寅小	乙未大 13	乙丑大	乙未小 ●[太初曆]の始まり	甲子大	甲午小	
張家山から	己巳小	戊戌大	戊辰小	丁酉大	丁卯小	丙申大	丙寅小	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	癸巳大	
睡虎地へ	己巳小	戊戌大	戊辰小	丁酉大	丁卯小	丙申大	丙寅小	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	癸巳大	
文帝4年前176	癸亥小	癸巳小	壬戌大	壬辰小	辛酉大	辛卯小	庚申大	庚寅小	己未大	己丑小	戊午大	戊子小	
張家山から	癸亥小	壬辰大 15	壬戌大	壬辰小	辛酉大	辛卯小	庚申大	庚寅小	己未大	己丑小	戊午大	戊子小	
睡虎地へ	癸亥小	壬辰大 15	壬戌小	辛卯大 15	辛酉大	辛卯小	庚申大	庚寅小	己未大	己丑小	戊午大	戊子小	
文帝5年前175	丁巳大 15	丁亥大	丁巳小	丙戌大	丙辰小	乙酉大	乙卯小	甲申大	甲寅小	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小

張家山から	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	乙卯大	乙酉小	甲寅大 15	甲申大	甲寅小	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小
睡虎地へ	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	乙卯大	乙酉小	甲寅大 13	甲申大	甲寅小	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小
文帝6年前 174	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	己卯大 15	己酉大	己卯小	戊申大	戊寅小	丁未大	丁丑小	丙午大	
張家山から	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小	丁丑大 13	丁未大	丁丑小	丙午大	
睡虎地へ	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小	丁丑大	丁未小	丙子大 15	丙午大	
文帝7年前 173	丙子小	乙巳大	乙亥小	甲辰大	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大 13	壬申大	壬寅小	辛未大	辛丑小	
張家山から	丙子小	乙巳大	乙亥小	甲辰大	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大	
睡虎地へ	丙子小	乙巳大	乙亥小	甲辰大	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大	
文帝8年前 172	庚午大	庚子小	己巳大	己亥小	戊辰大	戊戌小	丁卯大	丁酉小	丙寅大	丙申小	乙丑大	乙未小	甲子大 15
張家山から	庚午小	己亥大 15	己巳大	己亥小	戊辰大	戊戌小	丁卯大	丁酉小	丙寅大	丙申小	乙丑大	乙未小	甲子大
睡虎地へ	庚午小	己亥大 13	己巳大	己亥小	戊辰大 ■ 太初曆の始まり	戊戌小	丁卯大	丁酉小	丙寅大	丙申小	乙丑大 15	乙未小	甲子大
文帝9年前 171	甲午大	甲子小	癸巳大	壬戌大 13	壬辰大	壬戌小	辛卯大	辛酉小	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小	
張家山から	甲午小	癸亥大	癸巳小	壬戌大 13	壬辰大	壬戌小 ★ 太初曆の始まり	辛卯大	辛酉小	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小	
睡虎地へ	甲午小	癸亥大	癸巳小	壬戌大	壬辰小	辛酉大 15	辛卯大	辛酉小	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小	
文帝10年前 170	戊子大	戊午小	丁亥大 13	丁巳大	丁亥小 ● 太初曆の始まり	丙辰大 13	丙戌小	乙卯大	乙酉小	甲寅大	甲申小	癸丑大	癸未小
張家山から	戊子大	戊午小	丁亥大	丁巳小	丙戌小	丙辰大	乙酉大	乙卯小	甲申大 15	甲寅大	甲申小	癸丑大	癸未小
睡虎地	戊子大	戊午小	丁亥大	丁巳小	丙戌小	丙辰大	乙酉大	乙卯小	甲申大	甲寅小	癸未大 15	癸丑大	癸未小
文帝11年前 169	壬子大	壬午小	辛亥大	辛巳小	庚戌大	庚辰小	己酉大 15	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小	丁丑大	
張家山から	壬子大	壬午小	辛亥大	辛巳小	庚戌大	庚辰小	己酉大	己卯小	戊申大	戊寅小	丁未大	丁丑小	
睡虎地	壬子大	壬午小	辛亥大	辛巳小	庚戌大	庚辰小	己酉大	己卯小	戊申大	戊寅小	丁未大	丁丑小	
文帝12年前 168	丁未小	丙子大	丙午小	乙亥大	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	癸卯小	壬申大	壬寅小	辛未大 15	
張家山から	丙午大 15	丙子大	丙午小	乙亥大	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	癸卯小	壬申大	壬寅小	辛未大	
睡虎地	丙午大 13	丙子大	丙午小	乙亥大	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	癸卯小	壬申大	壬寅小	辛未大	
文帝13年前 167	辛丑大	辛未小	庚子大	庚午小	己亥大	己巳小	戊戌大	戊辰小	丁酉大	丁卯小	丙申大	丙寅小	乙未大
張家山から	辛丑小	庚午大	庚子小	己巳大 13	己亥大	己巳小	戊戌大	戊辰小	丁酉大	丁卯小	丙申大	丙寅小	乙未大
睡虎地	辛丑小	庚午大	庚子小	己巳大	己亥小	戊辰大 15	戊戌大	戊辰小	丁酉大	丁卯小	丙申大	丙寅小	乙未大
文帝14年前 166	乙丑小	甲午大 13	甲子大	甲午小	癸亥大	癸巳小	壬戌大	壬辰小	辛酉大	辛卯小	庚申大	庚寅小	
張家山から	乙丑小	甲午大	甲子小	癸巳大	癸亥小	壬辰大	壬戌小	辛卯大 15	辛酉大	辛卯小	庚申大	庚寅小	
睡虎地	乙丑小	甲午大	甲子小	癸巳大	癸亥小	壬辰大	壬戌小	辛卯大 13	辛酉大	辛卯小 ■ 太初曆の始まり	庚申大	庚寅小	
文帝15年前 165	己未大	己丑小	戊午大	戊子小	丁巳大	丁亥小	丙辰大 15	丙戌大	丙辰小	乙酉大	乙卯小	甲寅大 13	甲申大
張家山から	己未大	己丑小	戊午大	戊子小	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	乙卯大	乙酉小	甲寅大 13	甲申大	
睡虎地	己未大	己丑小	戊午大	戊子小	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	乙卯大	乙酉小	甲寅大	甲申小	
文帝16年前 164	甲寅小	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	己卯大 13	己酉大	己卯小 ● 太初曆の始まり	戊申大
張家山から	甲寅小 ★ 太初曆の始まり	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小
睡虎地	癸丑大 15	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小
文帝後元元年 163	戊寅小	丁未大	丁丑小	丙午大	丙子小	乙巳大	乙亥小	甲辰大	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	
張家山から	丁丑大	丁未小	丙子大 15	丙午大	丙子小	乙巳大	乙亥小	甲辰大	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	

	睡虎地	丁丑大	丁未小	丙子大	丙午小	乙亥大 [15]	乙巳大	乙亥小	甲辰大	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	
2	文帝後元2年前 162	壬申小	辛丑大 [15]	辛未大	辛丑小	庚午大	庚子小	己巳大	己亥小	戊辰大	戊戌小	丁卯大	丁酉小	丙寅大
	張家山から	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大	庚午小	己亥大	己巳小	戊戌大 [15]	戊辰大	戊戌小	丁卯大	丁酉小	丙寅大
	睡虎地	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大	庚午小	己亥大	己巳小	戊戌大 [13]	戊辰大	戊戌小	丁卯大	丁酉小	丙寅大
3	文帝後元3年前 161	丙申小	乙丑大	乙未小	甲子大	甲午小	癸亥大 [15]	癸巳大	癸亥小	壬辰大	壬戌小	辛卯大	辛酉小	
	張家山から	丙申小	乙丑大	乙未小	甲子大	甲午小	癸亥大	癸巳小	壬戌大	壬辰小	辛酉大 [13]	辛卯大	辛酉小	
	睡虎地	丙申小	乙丑大	乙未小	甲子大	甲午小	癸亥大	癸巳小	壬戌大	壬辰小	辛酉大	辛卯小	庚申大 [15]	
4	文帝後元4年前 160	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小	戊子大	戊午小	丁亥大	丁巳小	丙戌大 [13]	丙辰大	丙戌小	乙卯大	
	張家山から	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小	戊子大	戊午小	丁亥大	丁巳小	丙戌大	丙辰小	乙酉大	乙卯小	
	睡虎地	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小	戊子大	戊午小	丁亥大	丁巳小	丙戌大	丙辰小	乙酉大	乙卯小	
5	文帝後元5年前 159	乙酉小	甲寅大	甲申小	癸丑大	癸未小	壬子大	壬午小	辛亥大	辛巳小	庚戌大	庚辰小	己酉大	己卯小
	張家山から	甲申大	甲寅小	癸未大 [15]	癸丑大	癸未小	壬子大	壬午小	辛亥大	辛巳小	庚戌大	庚辰小	己酉大	己卯小
	睡虎地	甲申大	甲寅小	癸未大 [13]	癸丑大	癸未小	壬子大 [太初曆の始まり]	壬午小	辛亥大	辛巳小	庚戌大	庚辰小	己酉大	己卯小
6	文帝後元6年前 158	戊申大 [15]	戊寅大	戊辰小	丁丑大	丁未小	丙子大	丙午小	乙亥大	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	
	張家山から	戊申大	戊寅小	丁未大	丁丑小	丙午大 [13]	丙子大	丙午小 [太初曆の始まり]	乙亥大	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	
	睡虎地	戊申大	戊寅小	丁未大	丁丑小	丙午大	丙子小	乙巳大 [15]	乙亥大	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	
7	文帝後元7年前 157	癸卯小	壬申大	壬寅小	辛未大 [13]	辛丑大	辛未小 [太初曆の始まり]	庚子大	庚午小	己亥大	己巳小	戊戌大	戊辰小	
	張家山から	癸卯小	壬申大	壬寅小	辛未大	辛丑小	庚午大	庚子小	己巳大	己亥小	戊戌大 [15]	戊辰大	戊辰小	
	睡虎地	癸卯小	壬申大	壬寅小	辛未大	辛丑小	庚午大	庚子小	己巳大	己亥小	戊戌大	戊戌小	丁卯大 [15]	
8	景帝元年前 156	丁酉大	丁卯小	丙申大	丙寅小	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	癸巳大 [15]	癸亥大	癸巳小	壬戌大	壬辰小
	張家山から	丁酉大	丁卯小	丙申大	丙寅小	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	癸巳大	癸亥小	壬辰大	壬戌小	辛卯大
	睡虎地から	丁酉大	丁卯小	丙申大	丙寅小	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	癸巳大	癸亥小	壬辰大	壬戌小	辛卯大
9	景帝2年前 155	辛酉大	辛卯小	庚申大	庚寅小	己未大	己丑小	戊午大	戊子小	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	
	張家山から	辛酉小	庚寅大 [15]	庚申大	庚寅小	己未大	己丑小	戊午大	戊子小	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	
	睡虎地から	辛酉小	庚寅大 [13]	庚申大	庚寅小	己未大	己丑小	戊午大	戊子小	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	
10	景帝3年前 154	乙卯大 [15]	乙酉大	乙卯小	甲申大	甲寅小	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小	辛巳大	辛亥小	庚辰大	
	張家山から	乙卯大	乙酉小	甲寅大	甲申小	癸丑大 [13]	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小	辛巳大	辛亥小	庚辰大	
	睡虎地から	乙卯大	乙酉小	甲寅大	甲申小	癸丑大	癸未小	壬子大 [15]	壬午大	壬子小	辛巳大	辛亥小	庚辰大	
11	景帝4年前 153	庚戌小	己卯大	己酉小	戊寅大 [13]	戊申大	戊寅小	丁未大	丁丑小	丙午大	丙子小	乙巳大	乙亥小	甲辰大
	張家山から	庚戌小	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小	丁丑大	丁未小	丙子大	丙午小	乙亥大 [15]	乙巳大	乙亥小	甲辰大
	睡虎地から	庚戌小	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小	丁丑大	丁未小	丙子大	丙午小	乙亥大 [13]	乙巳大	乙亥小 [太初曆の始まり]	甲辰大
12	景帝5年前 152	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大 [15]	庚午大	庚子小	己巳大	己亥小	
	張家山から	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大	庚午小	己亥大	己巳小	戊戌大 [13]	
	睡虎地から	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大	庚午小	己亥大	己巳小	戊戌大	
13	景帝6年前 151	戊辰大	戊戌小	丁卯大	丁酉小	丙寅大	丙申小	乙丑大	乙未小	甲子大	甲午小	癸亥大 [13]	癸巳大	癸亥小 [太初曆]
	張家山から	戊辰大	戊戌小	丁卯大 [太初曆の始まり]	丁酉小	丙寅大	丙申小	乙丑大	乙未小	甲子大	甲午小	癸亥大	癸巳小	壬戌大
	睡虎地から	戊辰小	丁酉大 [15]	丁卯大	丁酉小	丙寅大	丙申小	乙丑大	乙未小	甲子大	甲午小	癸亥大	癸巳小	壬戌大

14	景帝7年前150	壬辰大の始まり	壬戌小	辛卯大	辛酉小	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小	戊子大	戊午小	丁亥大	丁巳小	
	張家山から	壬辰小	辛酉大	辛卯小	庚申大 15	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小	戊子大	戊午小	丁亥大	丁巳小	
	睡虎地から	壬辰小	辛酉大	辛卯小	庚申大 15	庚寅小	己未大 15	己丑大	己未小	戊子大	戊午小	丁亥大	丁巳小	
15	景帝中元元年前149	丙戌大	丙辰小	乙酉大 15	乙卯大	乙酉大	甲寅大	甲申小	癸丑大	癸未小	壬子大	壬午小	辛亥大	
	張家山から	丙戌大	丙辰小	乙酉大	乙卯小	甲申大	甲寅小	癸未大	癸丑小	壬午大 15	壬子大	壬午小	辛亥大	
	睡虎地から	丙戌大	丙辰小	乙酉大	乙卯小	甲申大	甲寅小	癸未大	癸丑小	壬午大 13	壬子大	壬午小	辛亥大	
16	景帝中元2年前148	辛巳小	庚戌大	庚辰小	己酉大	己卯小	戊申大	戊寅小	丁未大 15	丁丑大	丙子大	丙午小	乙亥大	乙亥大
	張家山から	辛巳小	庚戌大	庚辰小	己酉大	己卯小	戊申大	戊寅小	丁未大	丁丑小	丙午大	丙子小	乙巳大 13	乙亥大
	睡虎地から	辛巳小	庚戌大	庚辰小	己酉大	己卯小	戊申大	戊寅小	丁未大	丁丑小	丙午大	丙子小	乙巳大 13	乙亥小
17	景帝中元3年前147	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	癸卯小	壬申大	壬寅小	辛未大	辛丑小	庚午大 13	庚子大	庚午小	
	張家山から	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	癸卯小	壬申大	壬寅小	辛未大	辛丑小	庚午大	庚子小	己巳大	
	睡虎地から	甲辰大 15	甲戌大	甲辰小	癸酉大	癸卯小	壬申大	壬寅小	辛未大	辛丑小	庚午大	庚子小	己巳大	
18	景帝中元4年前146	己亥大	己巳小	戊戌大	戊辰小	丁酉大	丁卯小	丙申大	丙寅小	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	
	張家山から	己亥小	戊辰大	戊戌小	丁卯大 15	丁酉大	丁卯小	丙申大	丙寅小	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	
	睡虎地から	己亥小	戊辰大	戊戌小	丁卯大 13	丁酉大	丁卯小 ■太初曆の始まり	丙申大	丙寅小	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	
19	景帝中元5年前145	癸巳大	癸亥小	壬辰大 15	壬戌小	壬辰小	辛酉大	庚寅大 13	庚申大	庚寅小	己未大	己丑小	戊午大	戊子小
	張家山から	癸巳大	癸亥小	壬辰大	壬戌小	辛卯大	辛酉小	庚寅大 13	庚申大	庚寅小	己未大 ★太初曆の始まり	己丑小	戊午大	戊子小
	睡虎地から	癸巳大	癸亥小	壬辰大	壬戌小	辛卯大	辛酉小	庚寅大	庚申小	己未大 15	己未大	己丑小	戊午大	戊子小
20	景帝中元6年前144	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	乙卯大 13	乙酉大	乙卯小	甲申大	甲寅小	癸未大	癸丑小	壬午大	
	張家山から	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	乙卯大	乙酉小	甲寅大	甲申小	癸未大	癸丑小	壬子大 15	壬午大	
	睡虎地から	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	乙卯大	乙酉小	甲寅大	甲申小	癸未大	癸丑小	壬子大	壬午小	
21	景帝後元元年前143	壬子小	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小	丁丑大 15	丁未大	丁丑小	丙午大
	張家山から	壬子小	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小	丁丑大	丁未小	丙子大	丙午小
	睡虎地から	辛亥大 15	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小	丁丑大	丁未小	丙子大	丙午小
22	景帝後元2年前142	丙子小	乙巳大	乙亥小	甲辰大	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大	
	張家山から	乙亥大	乙巳小	甲戌大 15	甲辰大	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大	
	睡虎地から	乙亥大	乙巳小	甲戌大 13	甲辰大	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大	
23	孔家坡曆日	乙亥大	乙巳小	甲戌大	甲辰大	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大	
	景帝後元3年前141	庚午小	己亥大 15	己巳大	己亥小	戊辰大	戊戌小	丁卯大	丁酉小	丙寅大	丙申小	乙丑大	乙未小	
睡虎地から	庚午小	己亥大	己巳小	戊戌大	戊辰小	丁酉大	丁卯小	丙申大 15	丙寅大	丙申小	乙丑大	乙未小		
24	武帝建元元年前140	甲子大	甲午小	癸亥大	癸巳小	壬戌大 13	壬辰大	壬戌小	辛卯大	辛酉小	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小
	睡虎地から	甲子大	甲午小	癸亥大	癸巳小	壬戌大	壬辰小	辛酉大	辛卯小	庚申大	庚寅小	己未大 13	己丑大	己未小 ■太初曆
25	武帝建元2年前139	戊子大	戊午小	丁亥大	丁巳小	丙戌大	丙辰小	乙酉大	乙卯小	甲申大 15	甲寅大	甲申小	癸丑大	
	睡虎地から	戊子大 の始まり	戊午小	丁亥大	丁巳小	丙戌大	丙辰小	乙酉大	乙卯小	甲申大	甲寅小	癸未大	癸丑小	
26	武帝建元3年前138	癸未小	壬子大	壬午小	辛亥大	辛巳小	庚戌大	庚辰小	己酉大	己卯小	戊申大	戊寅小	丁未大 13	丁未大
	睡虎地から	壬午大	壬子小	辛巳大 15	辛亥大	辛巳小	庚戌大	庚辰小	己酉大	己卯小	戊申大	戊寅小	丁未大	
27	武帝建元4年前137	丁丑大	丁未小 ●太初曆の始まり	丙子大	丙午小	乙亥大	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	癸卯小	壬申大	壬寅小	辛未大

	睡虎地から	丁丑小	丙午大	丙子小	乙巳大	乙亥小	甲辰大	甲戌小	癸卯大 { 15	癸酉大	癸卯小	壬申大	壬寅小	辛未大
28	武帝建元5年前 136	辛丑小	庚午大	庚子小	己巳大 { 15	己亥小	己巳小	戊戌大	戊辰小	丁酉大	丁卯小	丙申大	丙寅小	
	睡虎地から	辛丑小	庚午大	庚子小	己巳大	己亥小	戊辰大	戊戌小	丁卯大	丁酉小	丙寅大 { 13	丙申大	丙寅小	
29	武帝建元6年前 135	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	癸巳大	癸亥小	壬辰大	壬戌小	辛卯大 { 15	辛酉大	辛卯小	庚申大	
	睡虎地から	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	癸巳大	癸亥小	壬辰大	壬戌小	辛卯大	辛酉小	庚寅大	庚申小	
30	武帝元光元年 前134	庚寅小	己未大	己丑小	戊午大	戊子小	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	乙卯大	乙酉小	甲寅大 { 13	甲申大
	睡虎地から	己丑大	己未小	戊子大 { 15	戊午大	戊子小	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	乙卯大	乙酉小	甲寅大	甲申小
	銀雀山曆日	己丑大	己未小	戊子大 { 13	戊午大	戊子小	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	乙卯大	乙酉小	甲寅大	甲申小
31	以下睡虎地の延長のみ 武帝元光2年前 133	癸未小	壬子大	壬午小	辛亥大 { 13	辛巳大	辛亥小 ■{ 太初曆の始まり	庚辰大	庚戌小	己卯大	己酉小	戊寅大		
32	武帝元光3年前 132	戊申小	丁丑大	丁未小	丙子大	丙午小	乙亥大	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大 { 15	癸卯大	癸酉小	壬寅大
33	元光4年前 131	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大	庚午小	己亥大	己巳小	戊戌大	戊辰小	丁酉大	丁卯小	丙申大	
34	元光5年前 130	丙寅小	乙未大 { 15	乙丑大	乙未小	甲子大	甲午小	癸亥大	癸巳小	壬戌大	壬辰小	辛酉大	辛卯小	
35	元光6年前 129	庚申大	庚寅小	己未大	己丑小	戊午大 { 13	戊子大	戊午小	丁亥大	丁巳小	丙戌大	丙辰小	乙酉大	乙卯小
36	元朔元年 前128	甲申大	甲寅小	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小	辛巳大	辛亥小	庚辰大 { 15	庚戌大	庚辰小	己酉大	
37	元朔2年前 127	己卯小	戊申大	戊寅小	丁未大	丁丑小	丙午大	丙子小	乙巳大	乙亥小	甲辰大	甲戌小	癸卯大 { 13	
38	元朔3年前 126	癸酉大	癸卯小 ■{ 太初曆の始まり	壬申大	壬寅小	辛未大	辛丑小	庚午大	庚子小	己巳大	己亥小	戊辰大	戊戌小	丁卯大
39	元朔4年前 125	丁酉小	丙寅大	丙申小	乙丑大 { 15	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	癸巳大	癸亥小	壬辰大	壬戌小	
40	元朔5年前 124	辛卯大	辛酉小	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小	戊子大	戊午小	丁亥大 { 15	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小
41	元朔6年前 123	乙卯大	乙酉小	甲寅大	甲申小	癸丑大	癸未小	壬子大	壬午小	辛亥大	辛巳小	庚戌大 { 13	庚辰大	
42	元狩元年 前122	庚戌小	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小	丁丑大	丁未小	丙子大	丙午小	乙亥大	乙巳小	甲戌大	
43	元狩2年前 121	甲辰小	癸酉大	癸卯小	壬申大 { 15	壬寅大	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大	庚午小	己亥大	己巳小	戊戌大
44	元狩3年前 120	戊辰小	丁酉大	丁卯小	丙寅大	乙未大 { 13	乙丑大	乙未小 ■{ 太初曆の始まり	甲子大	甲午小	癸亥大	癸巳小		
45	元狩4年前 119	壬戌大	壬辰小	辛酉大	辛卯小	庚申大	庚寅小	己未大	己丑小	戊午大	戊子小	丁巳大 { 15	丁亥大	
46	元狩5年前 118	丁巳小	丙戌大	丙辰小	乙酉大	乙卯小	甲申大	甲寅小	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小	辛巳大	辛亥小
47	元狩6年前 117	庚辰大	庚戌小	己卯大 { 15	己酉大	己卯小	戊申大	戊寅小	丁未大	丁丑小	丙午大	丙子小	乙巳大	
48	元鼎元年 前116	乙亥小	甲辰大	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大 { 13	壬申大	壬寅小	辛未大	辛丑小	庚午大	庚子小	
49	元鼎2年前 115	己巳大	己亥小	戊辰大	戊戌小	丁卯大	丁酉小	丙寅大	丙申小	乙丑大	乙未小	甲子大 { 15	甲午大	甲子小
50	元鼎3年前 114	癸巳大	癸亥小	壬辰大	壬戌小	辛卯大	辛酉小	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小	戊子大	戊午小	
51	元鼎4年前 113	丁亥大 { 13	丁巳大	丁亥小 ■{ 太初曆の始まり	丙辰大	丙戌小	乙卯大	乙酉小	甲寅大	甲申小	癸丑大	癸未小	壬子大	壬午小
52	元鼎5年前 112	辛亥大	辛巳小	庚戌大	庚辰小	己酉大 { 15	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小	丁丑大	丁未小	丙子大	
53	元鼎6年前 111	丙午小	乙亥大	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	癸卯小	壬申大	壬寅小	辛未大 { 15	辛丑大	辛未大	
54	元封元年 前110	庚子大	庚午小	己亥大	己巳小	戊戌大	戊辰小	丁酉大	丁卯小	丙申大	丙寅小	乙未大	乙丑小	甲午大 { 13
55	元封2年前 109	甲子大	甲午小	癸亥大	癸巳小	壬戌大	壬辰小	辛酉大	辛卯小	庚申大	庚寅小	己未大	己丑小	
56	元封3年前 108	戊午大	戊子小	丁巳大	丁亥小	丙辰大 { 15	丙戌大	丙辰小	乙酉大	乙卯小	甲申大	甲寅小	癸未大	
57	元封4年前 107	癸丑小	壬午大	壬子小	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	己卯大 { 13	己酉大	己卯小 ■{ 太初曆の始まり	戊申大	戊寅小	丁未大
58	元封5年前 106	丁丑小	丙午大	丙子小	乙巳大	乙亥小	甲辰大	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛丑大 { 15	
59	元封6年前 105	辛未大	辛丑小	庚午大	庚子小	己巳大	己亥小	戊辰大	戊戌小	丁卯大	丁酉小	丙寅大	丙申小	乙丑大

60	元封7年前104	乙未小	甲子大	甲午小	癸亥大 15	癸巳大	癸亥小	壬辰大	壬戌小	辛卯大	辛酉小	庚寅大	庚申小	
61	武帝太初2年前103	己丑大	己未小	戊子大	戊午小	丁亥大	丁巳小	丙戌大 13	丙辰大	丙戌小	乙卯大	乙酉小	甲寅大	
62	太初3年前102	甲申小	癸丑大	癸未小	壬子大	壬午小	辛亥大	辛巳小	庚戌大	庚辰小	己酉大	己卯小	戊申大 15	戊寅大
63	太初4年前101	戊申小	丁丑大	丁未小	丙子大	丙午小	乙亥大	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	癸卯小	壬申大	
64	天漢元年 前100	壬寅小	辛未大 13	辛丑大	辛未小	庚子大 ■ 太初曆の始まり	庚午小	己亥大	己巳小	戊戌大	戊辰小	丁酉大	丁卯小	
65	天漢2年前99	丙申大	丙寅小	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	癸巳大 15	癸亥大	癸巳小	壬戌大	壬辰小	辛酉大	辛卯小
66	天漢3年前98	庚申大	庚寅小	己未大	己丑小	戊午大	戊子小	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	乙卯大 15	乙酉大	
67	天漢4年前97	乙卯小	甲申大	甲寅小	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	己卯大	
68	太始元年 前96	己酉小	戊寅大 13	戊申大	戊寅小	丁未大	丁丑小	丙午大	丙子小	乙巳大	乙亥小	甲辰大	甲戌小	癸卯大
69	太始2年前95	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大 15	庚午大	庚子小	己巳大	己亥小	戊辰大	戊戌小	
70	太始3年前94	丁卯大	丁酉小	丙寅大	丙申小	乙丑大	乙未小	甲子大	甲午小	癸亥大 13	癸巳大	癸亥小 ■ 太初曆の始まり	壬辰大	壬戌小
71	太始4年前93	辛卯大	辛酉小	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小	戊子大	戊午小	丁亥大	丁巳小	丙戌大	丙辰小	
72	征和元年 前92	乙酉大 15	乙卯大	乙酉小	甲寅大	甲申小	癸丑大	癸未小	壬子大	壬午小	辛亥大	辛巳小	庚戌大	
73	征和2年前91	庚辰小	己酉大	己卯小	戊申大	戊寅小	丁未大 15	丁丑大	丁未小	丙子大	丙午小	乙亥大	乙巳小	甲戌大
74	征和3年前90	甲辰小	癸酉大	癸卯小	壬申大	壬寅小	辛未大	辛丑小	庚午大 13	庚子大	庚午小	己亥大	己巳小	
75	征和4年前89	戊戌大	戊辰小	丁酉大	丁卯小	丙申大	丙寅小	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	癸巳大	癸亥小	
76	後元元年 前88	壬辰大 15	壬戌大	壬辰小	辛酉大	辛卯小	庚申大	庚寅小	己未大	己丑小	戊午大	戊子小	丁巳大	丁亥小
77	後元2年前87	丙辰大	丙戌小	乙卯大 13	乙酉大	乙卯小 ■ 太初曆の始まり	甲申大	甲寅小	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小	辛巳大	
78	昭帝始元元年 前86	辛亥小	庚辰大	庚戌小	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小	丁丑大 15	丁未大	丁丑小	丙午大	丙子小	乙巳大
79	始元2年前85	乙亥小	甲辰大	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大	庚午小	己亥大 15	
80	始元3年前84	己巳大	己亥小	戊辰大	戊戌小	丁卯大	丁酉小	丙寅大	丙申小	乙丑大	乙未小	甲子大	甲午小	
81	始元4年前83	癸亥大	癸巳小	壬戌大 13	壬辰大	壬戌小	辛卯大	辛酉小	庚寅大	庚申小	己丑大	己未小	戊子大	戊午小
82	始元5年前82	丁亥大	丁巳小	丙戌大	丙辰小	乙酉大	乙卯小	甲申大 15	甲寅大	甲申小	癸丑大	癸未小	壬子大	
83	始元6年前81	壬午小	辛亥大	辛巳小	庚戌大	庚辰小	己酉大	己卯小	戊申大	戊寅小	丁未大 13	丁丑大	丁未小 ■ 太初曆の始まり	庚午大
84	元鳳元年 前80	丙子大	丙午小	乙亥大	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	癸卯小	壬申大	壬寅小	辛未大	辛丑小	
85	元鳳2年前79	庚子小	己巳大 15	己亥大	己巳小	戊戌大	戊辰小	丁酉大	丁卯小	丙申大	丙寅小	乙未大	乙丑小	
86	元鳳3年前78	甲午大	甲子小	癸巳大	癸亥小	壬辰大	壬戌小	辛卯大 15	辛酉大	辛卯小	庚申大	庚寅小	己未大	
87	元鳳4年前77	己丑小	戊午大	戊子小	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	乙卯大	乙酉小	甲寅大 13	甲申大	甲寅小	癸未大
88	元鳳5年前76	癸丑小	壬午大	壬子小	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	己卯大	己酉小	戊寅大	戊申小	丁丑大	
89	元鳳6年前75	丁未小	丙子大 15	丙午大	丙子小	乙巳大	乙亥小	甲辰大	甲戌小	癸卯大	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛丑大
90	元平元年 前74	辛未小	庚子大	庚午小	己亥大 13	己巳大	己亥小 ■ 太初曆の始まり	戊辰大	戊戌小	丁卯大	丁酉小	丙寅大	丙申小	
91	宣帝本始元年 前73	乙丑大	乙未小	甲子大	甲午小	癸亥大	癸巳小	壬戌大	壬辰小	辛酉大 15	辛卯大	辛酉小	庚寅大	
92	本始2年前72	庚申小	己丑大	己未小	戊子大	戊午小	丁亥大	丁巳小	丙戌小	丙辰大	乙酉大	乙卯小	甲申大	甲寅小
93	本始3年前71	癸未大 15	癸丑大	癸未小	壬子大	壬午小	辛亥大	辛巳小	庚戌大	庚辰小	己酉大	己卯小	戊申大	
94	本始4年前70	戊寅小	丁未大	丁丑小	丙午大 13	丙子大	丙午小	乙亥大	乙巳小	甲戌大	甲辰小	癸酉大	癸卯小	
95	地節元年 前69	壬申大	壬寅小	辛未大	辛丑小	庚午大	庚子小	己巳大	己亥小	戊辰大 15	戊戌大	戊辰小	丁酉大	丁卯小
96	地節2年前68	丙申大	丙寅小	乙未大	乙丑小	甲午大	甲子小	癸巳大	癸亥小	壬辰大	壬戌小	辛卯大 13	辛酉大	

97	地節 3 年 前 6 7	辛卯小 ■〔太初曆〕の始まり	庚申大	庚寅小	己未大	己丑小	戊午大	戊子小	丁巳大	丁亥小	丙辰大	丙戌小	乙卯大	乙酉小
98	地節 4 年 前 6 6	甲寅大	甲申小	癸丑大 〔1 5〕	癸未大	癸丑小	壬午大	壬子小	辛巳大	辛亥小	庚辰大	庚戌小	己卯大	
99	元康元年 前 6 5	己酉小	戊寅大	戊申小	丁丑大	丁未小	丙子大	丙午小	乙亥大 〔1 5〕	乙巳大	乙亥小	甲辰大	甲戌小	
100	元康 2 年 前 6 4	癸卯大	癸酉小	壬寅大	壬申小	辛丑大	辛未小	庚子大	庚午小	己亥大	己巳小	戊戌大 〔1 3〕	戊辰大	戊戌小

A Study on the sifen 四分 calendar in the early Western Han dynasty

Takayasu SUENAGA

This study uses recently excavated materials to correct errors in my previous theory on the calendar dates in the early Han period, and reports on how much we can now shed light on the sifen calendar in the early Han period.

In conclusion, ① from 206 BC to 203 BC, we can use an extension of the Qin calendar or a retroactive version of the calendar in Zhangjiashan 張家山's *Lipu* 曆譜 as the calendar of that time. ② from 202 BC to 186 BC, we can use the calendar in Zhangjiashan's *Lipu*. ③ from 185 BC to 171 BC, we can use an extension of the calendar in Zhangjiashan's *Lipu* or a retroactive version of the calendar in Shuihudi 睡虎地's *Zhiri* 質日 as the calendar of that time. ④ from 170 BC to 157 BC, we can use the calendar in Shuihudi's *Zhiri*. ⑤ from 156 BC to 104 BC, if there was no calendar reform during this period, we can use an extension of the calendar in Shuihudi's *Zhiri* as the calendar of that time. However, in the periods ①, ③, and ⑤, there is a possibility that the new moon day will be one zodiac sign behind at the beginning of the cycle of the {Taichu 太初 calendar}.

Furthermore, the calendar in Shuihudi's *Zhiri* proves that calendars from the Later Yuan period of Emperor Wen onwards (163 BC - 104 BC) do not have a starting point where the new moon day coincides with the solar term, which suggests that sifen calendars before the Taichu calendar may not have a calendar origin where the new moon and the solar term coincided.